What Does Anti-Natalism Mean Today? : From the Perspective of Pedagogy

Tomoki TANAKA
Tomo MURAMATSU
Hiromu HIGUCHI

In recent years, discussions about anti-natalism have been activated in various areas. This movement has been started with David Benatar's controversial book, *Better Never to Have Been: The Harms of Coming into Existence*, published in 2006. The purpose of this article is to examine what the type of questions has been raised in the movement, especially into pedagogy.

Firstly, we survey historical genealogy of anti-natalism, as well as Benatar's discussion. History of anti-natalism has been long both in the East and the West, and Benatar adds new insights to the genealogy using the method of analytic philosophy. Secondly, we clarify social conditions under which anti-natalism has been widely accepted today. Particularly we focus on contemporary topic such as reproductive ethics, various gaps in society, environmental problems. Then, we suggest there are three issues within recent anti-natalism, and consider the questions brought by each issue.

反出生主義をめぐる今日的状況と思想的課題

田　中　智　輝
村　松　　灯*
樋　口　大　夢**

本研究の目的は、反出生主義をめぐる議論の系譜およびデイヴィッド・ベネター以降の議論の展開を整理することを通して、反出生主義の思潮において誕生や生殖、あるいは教育に関してどのような思想的課題が提起されたのかを明らかにすることである。なお、本研究では反出生主義の命題に呼応した哲学・倫理学における議論を参照しつつも、とりわけ教育学・教育哲学において反出生主義がどのような問いをもたらしたのかを考察の中心に置く。検討にあたっては、まず反出生主義をめぐる思想の系譜を概観する（第１章）。さらに、今日、反出生主義が現代的課題との結びつきにおいて様々な分野・文脈で受容されていることに着目し、その受容の状況を整理する（第２章）。そのうえで、反出生主義の命題および反出生主義的な見解を踏まえつつ、教育学・教育哲学においてどのような思想的課題が引き受けられなければならないかについて考察を試みる（第３章）。

1　反出生主義が語ること

反出生主義（Anti-Natalism）とは何か。戸谷洋志は、「人間は生まれてこないほうが良い、と考える立場の総称である」と述べている[1]［戸谷 2019:44］。この名称は、南アフリカの哲学者であるデイヴィッド・ベネター（David Benatar）の著書である *Better Never to Have Been: The Harm of Coming to Existence*［2006］（以下、『生まれてこないほうが良かった』）[2]によって世界中で有名になった［戸

*帝京大学理工学部・講師
**東京大学大学院教育学研究科・院生

[1] 2019年5月の『現代思想』では、「現代思想43のキーワード」と題した特集が組まれ、反出生主義の項目については戸谷がまとめている。

[2] 本書は、2017年に小島和男と田村宜義によって『生まれてこないほうが良かった：存在してしまうことの害悪』という題目で翻訳がすずさわ書店から出版されている。

谷 2019:44]。このため、反出生主義という言葉は多くの場合ベネターとの関わりで捉えられることが多い［戸谷 2019:44］。しかし、反出生主義的な主張はかなり古くの時代から存在しており、人間が抱くある種の普遍性を伴った思索的課題のようにも思えてくる。そこで本章では、ベネター以前の古代における反出生主義的な主張と彼の反出生主義を検討することを通じて、次節以降で展開される議論の土台作りを試みたい。

１．１　古代における反出生主義――洋の東西を問わずに通底するもの――

先述したように反出生主義は、ベネターを通じて人口に膾炙することとなった。しかし、反出生主義的な主張は、まったく新しいものではない。古くは古代ギリシアや『旧約聖書』、古代インドの時代にもそうした主張を見て取ることができる。

たとえば、『コロノスのオイディプス』の中で詩人のソポクレスは、アッティカの人々の口を借りて「この世に生を享けないのが、すべてにまして、いちばんよいこと、生まれたからには、来たところ、そこへ速かに赴くのが、次に一番よいことだ」と述べている［ソポクレス 1973:72］。また、『旧約聖書』の中では、コヘレトの言葉4.2から4.3にかけて次のような反出生主義的な記述を見て取ることができる。

> 既に死んだ人を、幸いだと言おう。さらに生きて行かなければならない人よりは幸いだ。いや、その両者よりも幸福なのは、生まれてこなかったものだ。太陽の下に起こる悪い業を見ていないのだから。[『コヘレトの言葉』4:2-3]

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つの宗教が『旧約聖書』を聖典とすることを踏まえれば、これらの宗教と反出生主義的な主張はまったく無縁というわけにはいかないだろう。このことから西洋及びイスラム圏の文化の根底には、何らかの形で反出生主義的な主張が影響を与えていると推察できる。

舞台をかえて古代インドに目を向けてみても同様に反出生主義的な主張は見ることができる。例えば、ヒンドゥー教は、「すべての行為が必ず結果を生むというカルマ（業）の法則によって決定される輪廻転生（サンサーラ）と、この輪廻からの解放が救済であるという信仰によって特徴」づけられている［橋本・宮本・山下 2005:7］。この「輪廻からの解放が救済であるという信仰」は、

仏教やジャイナ教などの古代インドの様々な思想にも同様にみることができる［橋本・宮本・山下 2005:7］。生を繰り返すことを悪とし、それから解放されること、そしてそのための条件を探求するという思考が古代インド思想の決定的な方向となる［猪狩 1988:298f.］。したがって、古代インド思想においても人間が生まれてくるということは肯定的に捉えることができない。

以上を踏まえたとき、反出生主義的な主張は、洋の東西を問わずに世界的なレベルで古くから存在していることが明らかである。反出生主義的な主張は、西洋あるいは東洋と限定するのではなく、より広い視点で理解することが求められるだろう[3]。

１．２　デイヴィッド・ベネターの反出生主義――子どもを産むことの倫理性を問う――

前節の議論では、反出生主義的な主張が古くからあることと世界的なレベルで存在していることが明らかとなった。こうした反出生主義的な主張は、宗教的な背景のもとで論じられることが多かったが、ベネターはそれとは異なる関心から独自の反出生主義を展開する。その新しさは、分析哲学の立場から人間が生まれることの悪さを証明しようとしている点にある。

2006年に発表した著作以来ベネターの反出生主義については、分析哲学の分野に限らず、活発な議論が交わされている[4]。そのため、既にベネターの主

[3] 2020年1月から8月にかけて筑摩書房から全8巻（別巻は同年12月に刊行）で『世界哲学史』が刊行されている。納富信留は、1巻の序章で「これまで西洋、つまりヨーロッパと北アメリカ中心に展開されてきた「哲学」という営みを根本から組み換え、より普遍的で多元的な哲学の営みを創出する運動」が「世界哲学」と呼ばれていることを指摘し［納富 2020:11］、こうした観点から哲学史の再構成を試みている。このことを踏まえると、反出生主義を西洋あるいは東洋のどちらかに限るのではなく、より普遍的で多元的な視点から捉えることにも一定の意義があるように思われる。例えば、ケン・コーツは、ヒンドゥー教や仏教から、アルトゥール・ショーペンハウアー、19世紀ドイツで活躍したエドゥアルト・フォン・ハルトマン、20世紀ノルウェーで活躍した思想家ピーター・ウェッセル・ザプフェ、そしてベネターを「拒絶主義者の思想（rejectionist thought）」と位置づけて反出生主義の展開を追っている［Coates 2014］。しかし、このように反出生主義を世界的な観点から検討することは、壮大であり本章どころか本稿の射程を越えている。また、本稿は、反出生主義が教育学にもたらした問いを明らかにすることに主眼を置いているため、このことへの応答は稿を改めることにする。

[4] 例えば、ベネターのロジック自体の批判的検討を行った研究［Boonin 2012］や彼の論理の補強を試みる研究［Weinberg 2012］等を挙げることができる。日本では、2019年

張については様々な観点から解釈が進んでいる。まずはベネターの議論の要諦を確認しておこう。

『生まれてこないほうが良かった』の冒頭でベネターは、「存在してしまうことは常に深刻な害悪である」という同書の中心的命題を宣言して論を始める［Benatar 2006:1＝2017:9］。こうした主張の根底には、「ある人の人生における色々な良いことが、それがない人生よりもその人生をより良く進ませるとしても、それらの良いことがなくなったってその人は何も奪われたことにはならない、その人がそもそも、生まれ存在していなければ」という「洞察」がある［Benatar 2006:1＝2017:9］。ある人が存在していなければ、その存在していない人は何かを奪われることなどありえない。しかし、人は存在してしまうことによって、生まれて存在することのなかった人に降りかかるはずのない非常に深刻な害悪を被ってしまうのである［Benatar 2006:1＝2017:9］。ベネターはこうした主張を展開するために、自らが「基本的非対称性」と呼ぶ快と苦の非対称的な関係性について次のように述べる［ベネター 2019:40］。

> （1）苦の存在は悪い、そして
> （2）快の存在は良い。
> しかしながら、このような対称的な評価は、快と苦が存在していないことには当てはまるようには思われない。というのは、以下のことが真であるという強い印象が私にはあるからだ。
> （3）苦の不在は良い。たとえその良さを享受している人が誰もいなくても、しかし
> （4）快の不在は、こうした不在がその人にとって剥奪を意味する人がいない場合に限り悪くない。
>
> ［Benatar 2006:30＝2017:39　強調原文イタリック］

ここで注目すべきは（3）と（4）の非対称性である。（1）と（2）のように（3）と（4）の対称性が成り立つのであれば、（4）は「快の不在は、こうした不在がその人にとって剥奪を意味する人がいなくても悪い」となる必要がある。しかし、快の不在を悪く感じるのは、感じる人が存在している限り

11月号の『現代思想』において、「反出生主義を考える:「生まれてこないほうが良かった」という思想」と題した特集が組まれ、反出生主義の可能性、ベネターのロジックの整合性について等の検討が積極的に行われ、反出生主義をめぐる研究の裾野は広がりつつある。

においてである。したがって、快の不在を悪く感じる存在がいなければ、それは悪くないこととなる。このことからベネターは、苦痛を被る可能性のある人々を存在させない義務があると考える［Benatar 2006:32＝2017:41］。ベネターの主張からは、生まれる存在が苦痛を被る可能性を排除できない限りにおいて、子どもを産むことを肯定することができないのである。以上にもとづくと、ベネターの反出生主義は、子どもを産む側の倫理性を問う議論として理解することができる[5]。

本章で確認したとおり、反出生主義をめぐる思想には古く長い歴史がある。今日そうした歴史が省みられ、その系譜が遡及的に明らかにされるにあたって、ベネターの著書『生まれてこないほうが良かった』の与えたインパクトは大きなものであった[6]。快苦の「基本的非対称性」の観点に立つならば、誰であれ生まれることはその人にとって害悪であり、人類は段階的に絶滅するべきだというベネターの反出生主義は、多くの人にとって俄には受け入れ難い命題であり、果たしてそれが真に倫理的な命題といえるのかについて実に多様な議論を巻き起こした。だが、ベネターの主張に対して巻き起こったのは反感や批判ばかりではない。分析哲学においてベネターの推論は容易に論駁しがたい論理性を持ちうるものであることに加えて、生殖技術の発達によって生じる倫理的葛藤、人口過剰や環境問題、諸個人の生き難さにかかわる実存的な問題とも呼応しつつ、分析哲学というディシプリンや哲学研究の枠を超えて広く受容されている。こうした状況に鑑み、次章ではベネターの反出生主義が与えた多方面にわたるインパクトについて概括的な整理を試みることとする。

２　反出生主義がもたらしたインパクト

２．１　反出生主義をめぐる諸研究

「反出生主義」と一口に言ってもその内実は多様である。先述したように戸谷は、反出生主義を「人間は生まれてこないほうが良い、と考える立場の総称

[5] ベネターはこうした主張が人間だけに適用されるのではなく、動物を含めたあらゆる存在に対して適用可能であると考えている［Benatar 2006:2＝2017:10］。

[6] ベネターの反出生主義の紹介者の一人であり、早い時期から批判的検討に取り組んでいる森岡は2017年に『生まれてこないほうが良かった』の訳書が出版されたことについて、日本における反出生主義をめぐる議論において大きなインパクトを与えたと振り返っている［森岡・戸谷 2019:9］。

である」としているが、森岡はこれをさらに「自分が生まれてきたことを否定する思想」すなわち「誕生否定」と、「人間を新たに生み出すことを否定する思想」すなわち「出産否定」の二つに大別している［森岡 2020:14］。そのうえで森岡は、前者の「誕生否定」としての反出生主義に着目し、「生まれてこない方が良かった」という考え方が古代ギリシア文学、古代インドの宗教哲学、近現代ヨーロッパの文学と哲学、そして現代の分析哲学においていかに思考されてきたのかを描き出す。森岡の試みは、反出生主義の思想史を描き出すだけではなく、それを踏まえて「生命の哲学」の将来についての見通しを示すことを目的するものであり、いわば反出生主義の側から逆照射することで生命の哲学の再考に迫るものである［森岡 2020］。こうした試みはベネターの自身の仕事と必ずしも問題関心を共有するものではない。というのも、ベネターの反出生主義が議論されてきた文脈は基本的に英米を中心とする分析哲学に規定されている[7]。それに対し、森岡に代表されるベネターへの応答は、反出生主義の命題について、その真偽をめぐる分析哲学的な論争としてではなく、実存的な問いとして反出生主義を捉え直すものである。あるいは、ベネターの反出生主義を人間社会の変容（環境問題や生殖医療の発達など）において先鋭化してきた現代的な問いとの結びつきにおいて引き受けるといった傾向は、日本における反出生主義の受容において多々見受けられる。また、先述した森岡の研究において論究されている思想家に加え、ルーマニアの作家エミール・シオランが1973年に著した『生誕の災厄』への関心も高まっており、「誕生否定」の側面を強くもつ反出生主義の思想に注目が集まっている[8]。

他方、「出産否定」の側面に着目した研究も様々なバリエーションにおいて進められている。『生まれてこないほうが良かった』をはじめとするベネターの諸論考の訳者である小島和男は、生の価値に関する不可知論に基づいて、ベネターの反出生主義を批判的に継承しつつ、「出生を奨励することは道徳的に良いことではない」とする「反ー出生奨励主義」の立場を提起する［小島 2019］。反ー出生奨励主義は「存在しないほうが存在することよりも良い」かどうかも、反対に「存在したほうが存在しないことよりも良い」かどうかも同様に分からない（不可知である）とする点でベネターの反出生主義とは前提を

[7] 分析哲学におけるベネターの反出生主義をめぐる論争については［ベネター 2019］を参照。同論文ではベネターの反出生主義についての批判と、それに対するベネターの反批判がまとめられている。

[8] シオランの思想について論じたものとして［大谷 2019］。

異にする。ただし同時に、子作りを奨励するような出生主義の前提を共有しないという立場をとるという点ではベネターと一定の共通性を有する。小島による反ー出生奨励主義は反出生主義と出生主義の双方への批判性を持つものであるが、こうした二方向への批判性はそもそも反出生主義を通り抜けることによって可能となっている。したがって、反出生主義のインパクトは、子どもの誕生は良きものであることを自明とする出生主義の思想に再考を迫るものである点で思想的意義をもつものとして広く思想・哲学研究において参照されるものとなった言えよう。

以上のような事情から、反出生主義についての検討は、ハンス・ヨナスやハンナ・アレント、あるいはイマニュエル・レヴィナスといった出生や生殖といった概念に重きを置く出生主義的な思想との関わりにおいて盛んに議論されてきた。ベネターの反出生主義との比較においてヨナスの倫理思想を再考する吉本陵による研究や、反出生主義的な状況に対していかにヨナスの出生主義は応答可能かを論じた戸谷の研究は、その先駆的な試みである［吉本 2014; 戸谷 2019］。またアレントの「出生性」の概念やレヴィナスの「多産性・繁殖性」の概念の意義についても、反出生主義的な観点を踏まえた再検討がなされている［田中ほか 2020］。

これまで見てきたように反出生主義をめぐる日本の諸研究は、ベネターの議論に触発されつつ、それを哲学や倫理学、政治哲学といった多様な文脈と接合させることで、広がりと多様性を持つものとなっている。しかしながら、そのインパクトは以上で示したような思想･哲学研究における受容にとどまらない。今や反出生主義は、生をめぐる切実な問題と向き合うための思想として、現代的なテーマとの結びつきにおいて社会において受容されつつある。以下では、現代的なテーマとして反出生主義がどのように引き受けられているのかを見ていくことにしよう。

２．２　現代的なテーマとしての反出生主義

ベネターを契機として反出生主義が広く社会にインパクトを与え得た背景には、どのような問題状況や問題意識があったのだろうか。戸谷によれば、はじめてベネターが日本に紹介されたのは、2000年代にロングフル・ライフ訴訟をめぐる加藤秀一の論考［加藤 2004; 2007; 2010］においてであるという［森岡･戸谷 2019:9］[9]。ロングフル・ライフ訴訟では「自分を生んだこと」に対する

[9] ロングフル・ライフ訴訟においては原告が置かれた境遇における苦しみが、原告が生

親やその関係者の責任をめぐって、具体的には「先天的な障害を伴って、あるいは社会的な不遇のもとに生まれた人が、自分の存在に責任を負うとみなす医療関係者や親に対して損害賠償を求める」訴えがなされた［加藤 2019:138］。不遇のもとに、なぜ私を産んだのか。そうした境遇から私を救えないにもかかわらず、なぜ私を存在させたのか。もし生まれてこなければ、こんなにも辛く悲しい思いをすることもなかったのに。生まれてこないことは、生まれてくることよりもよいというベネターの命題は、自ら選択したのではない不遇において身に迫る説得力をもつ。

反出生主義を喚起するこうした切実さは、いっこうに改善されない格差、出口のない貧困においても見出される。映画『存在のない子供たち』(2018年公開)で描かれるのは中東の貧民窟に生まれ育った12歳の少年の苦悩である。彼は不条理に満ちた過酷な生活をつづけた末に「僕を産んだ罪」で両親を告訴する。両親が出生届を出さなかったために、少年は自分の誕生日も知らないままに、法的には社会に存在すらしていない者として生きることを強いられてきた。学校へ通うこともできず、朝から晩まで劣悪な労働に耐えるほかない。家を飛び出したものの、彼の行先にはいっそう過酷な現実が待ち受けている。満足に育てられもしないのに、過酷な現実しか待ち受けていないのに、なぜ自分を産んだのか。差別や偏見、格差や貧困が、周囲の人間にも本人にもどうすることもできないほど決定的な条件となったとき、反出生主義は分析哲学上の命題ではなく、生まれることの害悪は身に迫るリアリティとなる。このように、反出生主義が大きなインパクトを持ち得たひとつの背景には、誰かにとってこの世界は生まれるに値するものではなくなってしまったという事実がある。

しかし、なお世界は誰かにとっては生まれるに値するものであり続けている。

まれて存在しているということ自体によって引き起こされたものであるか否かが重要な争点となる。原告の主張が「自分にとって生まれたこと自体が損害である」という点にあるという意味では、生まれること自体が害悪であると主張するベネターの反出生主義に重なる部分がある。しかし、ベネターにおいては、境遇とは関わりなく、人間は誰であれ生まれてこない方がよいとされていることには注意が必要であろう。ベネターは、いかに恵まれた境遇のもとに生まれるとしても、やはり生まれるより生まれてこないほうがよいのだと言う。したがって、ベネターの反出生主義には優生学的な要素は含まれない。この点でベネターの反出生主義は、ロングフル・ライフ訴訟における「損害」の訴えとも、誤診等のために中絶を選択できなかったことによって生じた損害に対する親からの訴えであるロングフル・バース訴訟とも、根本的な前提を異にするものとして捉えられる。

そうであるならば、生まれるに値する「誰か」であることを選ぶことは可能なのか。先に挙げたロングフル・ライフ訴訟の前提となっているのは、その「誰か」は選ぶことができたはずだという見方である。生殖医療の発達によって、産むことはこれまで以上に選択や判断が関与するものとなっている。ロングフル・ライフ訴訟（「生まれた」ことによって子が被った損害をめぐる訴訟）、ロングフル・バース訴訟（「生んだ」ことによって親が被った損害をめぐる訴訟）は、生殖医療の発達によって生じた新たな生命倫理・生殖倫理の問題と反出生主義が相互に結びついていることを示してもいるのである。

川上未映子の小説『夏物語』においても、主人公がAID（パートナー以外の第三者から精子提供を受ける人工授精法）によって子を産むことの倫理的な葛藤のなかで反出生主義の問いと対峙する様が描かれる[10]。「産む」ことは本当によいことなのか。パートナーなしの妊娠／出産を望む主人公「夏子」と、AIDによって生まれた「善百合子」とのあいだでなされた次のようなやりとりは、その葛藤を端的に表している。

善百合子「ねえ、子どもを生む人はさ、みんなほんとに自分のことしか考えないの。生まれてくる子どものことを考えないの。子どものことを考えて、子どもを生んだ親なんて、この世界にひとりもいないんだよ。ねえ、すごいことだと思わない？それで、たいていの親は、自分の子どもだけは苦しい思いをさせないように、どんな不幸からも逃れられるように願うわけでしょう。自分の子どもがぜったいに苦しまずにすむ唯一の方法っていうのは、その子を存在させないことなんじゃないの。生まれないでいさせてあげることだったんじゃないの。」

夏子　「それは――生まれてみないと、わからないことも。」

善百合子「その『生まれてみなければわからない』っていう賭けは、いったい誰のための賭けなの？」［川上 2019:435］

産むことはつねに生まれる者との合意なくなされるが、もし生まれることが害悪であるなら、産むことの暴力性は生まれる者にとって決定的なものとなる。反出生主義が突きつけるのは、生まれることの害悪であると同時にこれまでもっぱら善きこととして語られてきた「産む」ことの暴力性でもある。無論、

[10]『夏物語』における反出生主義をめぐる議論として［川上・永井 2019］を参照。

かかる「産む」ことの暴力性は産む性としての女性にのみ課せられるものではない。産む性として女性を規定してきた社会規範や、そうした社会規範において根強く残り続ける女性に対する男性の暴力性もまた問題化されなければならない[11]。上述した小島の反-出生奨励主義の立場は、こうした議論に連なるものである。

ベネターをはじめとする反出生主義の主張においては生まれることの「害悪」は生まれた当人にとっての「悪さ」として論じられてきた。それに対して、出生主義が生まれることの「よさ」を言うとき、そこで強調されるのは世界にとっての出生の「よさ」である。「出生性」を鍵概念とする政治思想を形成したアレントや、彼女の影響を受けつつ未来倫理を基礎づけたヨナスはその好例であろう。したがって、反出生主義は出生主義が看過してきた、生まれることの生まれる者にとっての価値という論点を提示したことにおいても独自の視角を有している。

先に触れたように、当初は生まれる者にとっての「害悪」を論究する点に独自性を有していた反出生主義の議論は、今日、「世界にとって人間が生まれることはよいことなのだろうか」という問いにおいて新たな射程を獲得しつつある。かかる視点の変化には環境問題の深刻化が少なからず影響している。近年、大規模な森林火災による被害、津波被害、豪雨被害などが世界中で発生しており、そしてCOVID-19の世界的なパンデミックを通じて今日私たちはこれまでの人間生活のあり方を問い直さなければならない状況に置かれている。こうした中で、オランダの大気化学者であるパウル・クルッツェンが提起した「人新世」という地質学的な年代把握と、そこで主張されている人間が地球環境に与える影響の大きさ、その深刻さについての関心が急速に高まっている[12]。

こうした事態に直面して、科学技術の発展を支えてきた人間中心主義的な思考様式もまた鋭く問い直される。先述した「世界にとって人間が生まれることはよいことなのだろうか」という反出生主義的な問いが生じるのはここにおいてである。地球環境における人間活動の影響が決定的なものであり、その影響は他の生物種、そして人間自身の生存を脅かすものとなっているとするならば、

---

[11] 妊娠・出産にかかわるジェンダーの問い直しに関してはフェミニスト現象学を中心に一定の蓄積がなされている［稲原ほか 2020］。加えて、フェミニスト現象学の議論を踏まえつつ男性学的な「産み」論の可能性が模索されている［居永 2015］。

[12] かかる関心は自然科学の分野のみならず、人文学においても共有されるものとなっている。人新世をめぐる哲学的考察として［斎藤 2020; 篠原 2018］を参照。

その諸悪の根源たる人間は生まれるべきではないのではないか。あるいは少なくとも絶滅すべきなのではないか。極端とも思えるこうした発想は、しかし、人間の手の加わっていない自然（ウィルダネス）の保存を求める思想や環境保護運動において一定の支持を得ている[13]。

実のところ、ベネター自身の反出生主義の議論も人類の段階的な絶滅を支持するという点で、上述した環境保護運動に通ずる理路を含んでいる。というのも、ベネターは「人は誰もが生まれてこない方がよい」という命題を真であるとしつつも、現実の子作りに対して自分の見解が何らかの影響を及ぼすことは期待していないとして、「多大な害悪を引き起こすにもかかわらず、子作りは今後も阻止されないでしょう」と述べている［Benatar 2006:VII＝2017:3］。そして、ベネターは実際のところ生殖の禁止でも、自殺の奨励でもなく（ベネターは生まれることは害悪であるが、生まれた者が生き続けることは必ずしも悪ではないとしている）、段階的な人類の絶滅をよしとするのである[14]。

本章で見てきたように、反出生主義の議論は、貧困や格差といった社会経済的な文脈、生殖医療の発達にともなう生命倫理・生殖倫理的な文脈、産む性をめぐるジェンダーやフェミニズム的な文脈、そして人新世の時代という問題把握に象徴される環境倫理学的な文脈において受容されてきた。こうした受容の動向に鑑みるならば、反出生主義が論争的であるのは、分析哲学における命題の論証においてだけではなく、反出生主義的な命題が受け入れられた状況（すなわち反出生主義的状況）においても同様であると言えるだろう。ベネターの反出生主義の命題は、本章で検討した様々な文脈において受容され、多様な反出生主義的見解を派生させている。次章では、こうした派生的見解も踏まえつつ、反出出生主義の議論が教育学にどのような問いをもたらしたのかを考察する。

---

[13] なお、人新世の提唱者であるクルッツェンは環境倫理への関心は、反出生主義的な発想とは相容れないものである。クルッツェンは、すでに人間の手が加わっていない自然などないのであるから、温暖化対策のためには技術によって気候の変化に手を加える他ないという立場をとり、気候問題を解決のためには気候工学を推進すべきだとしている［吉永 2019:24］。

[14] 出生の害悪の主張から段階的絶滅へというベネターの議論の展開に対して、小泉義之はそうした理路にベネターの反出生主義の日和見的な性格が見られると指摘している［小泉 2019］。

３　反出生主義が教育学にもたらした問い

ここまで、反出生主義の系譜とベネターによる反出生主義の概要を明らかにしたうえで（第1章）、ベネターの議論が大きなインパクトを与え得た現代的な問題状況（反出生主義的状況）を整理した（第2章）。本章では、こうした反出生主義的状況が、教育学にどのような問いを新たにもたらしたのかについて考えてみたい。

反出生主義が「異議申し立て」の対象として念頭に置いているのは、さしあたり出生主義の思想であるが、反出生主義が出生主義の何を問題にし、何をめぐって対立しているのかは、必ずしも一義的ではない。反出生主義が教育学にもたらした問いについて考察するためには、まずはこの点を整理する必要があるだろう。以下では、これまでの議論を再構成しつつ反出生主義を三つの問題系に整理したうえで、それぞれについて教育学がどのように応答してきたのか／応答し得ていないのかを検討していくこととする。

３．１　実存的反出生主義

一つ目の問題系は、「実存的反出生主義」ともいうべきものである。この問題系においては、出生という主題が実存的な位相で捉えられ、他ならぬ「この私」の生がその焦点となる。すなわち、実存的な生の生きづらさから「私の生は生まれてくるに値する生か」が否定的に問い直されるのである。実存的反出生主義は、反出生主義の系譜のなかでも最も長い歴史をもつものである。実存的反出生主義の問題系を構成する思想として、古代ギリシアや古代インドなどにも見られる反出生主義的思想の他、シオランやショーペンハウアー、ニーチェなどを挙げることができるだろう。これらのテキストが多くの人々の共感を呼び、「古典」として読み継がれてきたという事実こそが、実存的反出生主義があくまで「この私」にとっての生きづらさを問題としながらも、同時にそうした生きづらさがあらゆる生に共通する存在論的条件であることを証している。私たちは生きづらい生を生き続けるしかないのであり[15]、受苦的な存在であること

[15] ここで、反出生主義と出生主義が最も鋭く対立するのは、「生まれてくること」あるいは「産むこと」の倫理的なよさをめぐってであり、「生き続けること」の価値については対立がないことを確認しておくことは有益だろう。例えば、ベネターは「始めるに値する生」と「続けるに値する生」を区別し、ある人生が「続けるに値しない生」であるならば当然その生は「始めるに値しない生」であるが、必ずしもその逆は成り立たな

を存在論的に宿命づけられているのである。

教育学においても、多くの研究がこうした存在論的受苦性を見つめつつ、そこからどのような人間形成や教育が可能なのかを検討してきた。出生と同時に私たちに重荷として課せられる存在論的受苦性は、むしろ教育学の王道ともいうべき主題であり、実存的反出生主義への応答として人間形成や教育という営みが意味づけられてきたといえるかもしれない。例えば、檜垣立哉や西平直は、「実存」ないし「私」という問題について、（哲学でよく扱われる「死」という観点からではなく）この世界に生まれてくる者としての「子ども」や「出生」という観点から検討し、私たちがこの世界に存在し、この世界で生きていくということの意味を改めて問い直している［檜垣 2012; 西平 2015］。また、教育哲学の研究者たちによる論集『教育学のパトス論的転回』は、存在論的受苦性こそを紐帯とした共同性の可能性を主題としつつ、そうした共同性がひらかれる場として、あるいはそうした試みを支える場として、教育の営みを捉え直そうとしたものといえるだろう［岡部・小野 2021］。

３．２　社会的反出生主義

反出生主義の二つ目の問題系では、実存的な受苦とは異なる、社会的条件のなかで生まれる受苦の感覚が問題となる。特定の社会的条件のもとでは、ある者には出生の受苦性が強く経験され、別の者にはほとんど経験されない。私たちは存在論的受苦性を分かちもつが、事実の問題として、人々の間でその感覚には強弱があるということだ。私たちの社会には格差や差別が厳然として存在し、受苦の経験には不公正な偏りが生じているのである。こうした社会的な受苦の感覚に焦点をあてているという意味で、この問題系を「社会的反出生主義」と名づけることができるだろう。社会的反出生主義が突きつけるのは、「この社会は、生まれてくるに値する社会なのか」という問いである。本論文でいえば、第2章で検討した、映画『存在のない子どもたち』のような格差や貧困の問題に根ざした反出生主義の思想はもちろんのこと、ロングフル・ライフ訴訟を通じて提起された反出生主義的思想も一部この問題系に連なるものといえるだろ

いと論じる。というのも、彼によれば、「私たちは、人生を始めないという判断をすることによりも、終わらせるという判断をすることにより強い理由を必要とする」からだ［Benatar 2006:23＝2017:32］。森岡もまた、「生まれてこなければよかった」という思いが「死んでしまったほうがよい」という思いへとつながることはあり得るものの、後者の思いが前者のなかに含まれるとはいえないと指摘する［森岡 2020:47-48］。

う。というのも、この訴訟の争点は、第一義的には生殖倫理に関わる問題にあるものの、より基底的には、特定の社会的条件においてディスアビリティが固定化されるという問題があると考えられるからである。ここで重要なのは、「この社会は、生まれてくるに値する社会なのか」という社会的反出生主義の問いにおいて、出生主義の問題性が明るみになるということだろう。すなわちその問題性とは、出生主義ではこれまで「生まれてくること」の共同体にとってのよさを強調してきたが、翻って共同体の側が生まれてくるに値するものであるか否かを問う視点はきわめて弱かったのではないかということである。格差や差別が先鋭化する今日的状況に鑑みれば、社会的反出生主義による問題提起は、より重要性を増していると考えられる[16]。

社会的反出生主義に対する教育学からの応答は、実存的反出生主義と比較すれば決して多いとはいえない。とはいえ、教育社会学を中心とした教育格差ないし教育を通じた格差の再生産に関する研究や、社会的不平等の解消を目指した教育の理論や実践といった、関連分野の研究には一定の蓄積がある[17]。社会的反出生主義による問題提起を受けて、必ずしもすべての人にとって生まれてくるに値するとはいえない社会状況を直視し、そのなかで教育には何がなしえるのか、何をなすべきかが新たに問われている。その試みの一つとして、こうした関連分野の研究との接続可能性や、教育学と正義論や社会契約論などとの接続可能性を探ることも考えられるだろう［田中ほか 2021:99-100］。ただし、同時に、そうした研究を通じて社会の変革可能性を探ることはきわめて困難だということも認めねばならない。というのも、そもそも、社会的な連帯や変革が不可能と思えるほどに、受苦の経験には偏りや分断が生じているということこそを、社会的反出生主義は告発しているからである。その問題提起に応えるためには、実態を厳しく見すえたうえで、研究上の課題としてだけではなく、現実の社会にコミットする具体的な施策を積み重ねていく必要があるだろう。

---

[16] 例えば、近年、生まれてくる子どもは親を選べないという意味の「親ガチャ」というインターネットスラングが流行語となっているが、この語の背景には、生まれた家庭環境によって人生が大きく左右されるという認識がある。「生まれ」によって社会的な優遇や不遇が決定されるという感覚が広く共有されつつあるという意味で、この語の流行は、現代日本における格差や貧困の問題が、（少なくとも人びとの意識のレベルで）社会経済的階層の固定化や分断にまで至りつつあることを示唆しているように思われる。

[17] 例えば、志水らの研究［志水 2009］や松岡らの研究［松岡 2019］など。

３．３　地球史的反出生主義

三つ目の問題系は、「地球史的反出生主義」というべきものである。第2章で触れたように、私たちは今日、環境問題や食糧、エネルギーをめぐる問題、人口知能をはじめとするテクノロジーに関する問題など、人類の活動に起因する数多くの問題に直面している。「人新世」や「ポストヒューマン」の議論に象徴されるように、人類の活動が質的に大きく変化し、その存在そのものが倫理の対象となるという意味で、未曾有の時代を迎えているといえるだろう。そうした状況のもと、反出生主義の思想もまた、新しい装いのもとに現れている。それが地球史的反出生主義であり、「人類は生まれてきてよいのか」あるいは「人類を産み落としてよいのか」と問う。この問いには、暗黙のうちに二つの認識が前提されている。一つは、人類の活動によって、自然環境や社会の広範囲にわたって不可逆的な悪影響が与えられているという認識であり、もう一つは、私たちは人類の出生を（少なくとも、出生・非出生のレベルで）統御できるという認識である。地球史的反出生主義はこの両者、すなわち「人類の活動や存在は、自然環境や人類自身にとって悪」であり、かつ「私たちは人類を存在させないことができる」という二つの認識がそろうことで可能になる。とりわけ後者については、生殖に関わるテクノロジーが進展した今日においてはじめて広く共有され得た認識であり、二つの認識がそろって成立する事態は地球史的に見て新しいものといえよう。第2章で検討したように、地球環境に与える人類の影響から反出生主義的思想を展開する動きがあるが、こうした動きはまさに地球史的反出生主義の問題系を形成するものである[18]。

地球史的反出生主義の問いは、実存的反出生主義や社会的反出生主義の問いとは、明らかに位相を異にしている。しかも、人類の活動や存在の質的な変化を背景にこの問いがもたらされたことを考えると、地球史的反出生主義の時代においては「人類」の再定義が不可避であり、そうである以上、人文学の一つとしての教育学もまた、その存在意義や理論的基盤について問い直さざるを得

[18] 環境問題に関するデモやムーブメントのなかには、地球史的反出生主義の思想を表明しているものも見られる。例えば、2019年には、カナダの女子大学生エマ・リムが「#NoFutureNoChildren」（未来がないなら子どもは産まない）というハッシュタグを掲げ、気候変動や環境破壊に関する対策の強化を求める活動を開始した。リムはこの活動のなかで、壊滅的な未来しかない地球に子どもを産み落とすことはできないと主張し、10代を中心に賛同を集めた。https://www.usatoday.com/story/news/nation/2019/09/19/no-future-no-children-pledge-teens-refuse-have-kids-until-climate-change-action/2372010001/（2022/01/01最終閲覧）。https://front-row.jp/_ct/17303946（2022/01/01最終閲覧）。

ない。つまり、地球史的反出生主義の提起する論点は、教育学という学問そのものを揺るがすものでもあるのだ。地球史的に見てもこれまでには経験したことのないような新しい時代に、私たちは子どもたちに対して、どのような世界像や人間形成ないし教育のモデルを示すことができるのか。教育学は新たな課題を突きつけられている。

だが、現在のところ、そうした課題に対する十分な応答はなされていないように思われる。こうしたなかで、検討の手がかりとして、ハンス・ヨナスの思想が教育学的に読み直されていることは注目に値する動きといえよう。前章でも確認したように、ベネター以降の反出生主義は、出生や生殖に重点を置く出生主義的な思想との関わりにおいて検討されてきたが、ヨナスはこうした出生主義的な立場をとる代表的論者の一人に挙げられている。だが、ここで看過し得ないのは、彼が出生の重要性を論じたのは、科学技術時代に対応する新たな倫理学を構想するなかでのことであったということである。ヨナスは主著『責任という原理』において、科学技術の急速な進展にともなって、倫理についての考え方も大きく転換されるべきであるとして、未来世代への責任を軸とした思想を展開した。そこで前提されているのは、現在の人類の活動が未来世代にどのような帰結をもたらすか、誰もその正確な影響について知りえないほどに進歩した科学技術文明の状況である。だが、それでもなお未来において責任という倫理的な事象が成立するためには、あらゆる生物のなかで唯一責任能力を有する人類が存在し続けることが不可欠であり、その限りにおいて人類の出生は倫理的義務であるというのが、ヨナスの主張である。彼によれば、未来世代に対してその存在そのものを脅かすほどの負の影響を与え得るのも人類であるが、そうした事態への責任を負い得るのもまた人類であるということになる。その議論にしたがえば、科学技術時代における教育の第一義的な役割は、責任能力を有し、かつ、未来世代への責任を主体的に担おうとする人間を育てることにある。

こうしたヨナスの思想は、問題状況に対する態度こそ正反対ではあるものの、問題状況そのものについては地球史的反出生主義と認識を共有している部分が大きい。その点からすれば、近年教育学においてヨナスの思想に着目した研究が出始めていることは、教育学が地球史的に未曾有の時代が到来しつつあることを踏まえ、こうした時代に対応する世界像や人間形成ないし教育のモデルをいかに示すかという、先述の課題に取り組み始めた証左と見ることができる[戸谷ほか 2020]。

いずれにせよ、地球史的反出生主義が提起する問いは、教育学にとってもまったく新しい問いといってよいだろう。実存的反出生主義にせよ社会的反出生主義にせよ、他の問題系に対しては、教育学はこれまでも応答を試みてきたし、少なくともこれらの問題系に関連する研究や議論には一定程度の蓄積がある。だが、地球史的反出生主義については、これまでの教育学の枠組みでは応答不可能であるのみならず、その前提となる時代把握からして、いまだ十分には受け入れられていないように思われる。だが、端的に人類の存在が問題となっているという意味では、教育学に新たにもたらされた思想的課題は、単に「思想的」なものにとどまらず、現実的で実践的な問題でもあるといえるだろう。

しかも、地球史的反出生主義が提起する問題は、実存的反出生主義や社会的反出生主義に対する教育学のこれまでの応答も無効化する可能性がある。というのも、三者はそれぞれ入れ子構造になっており、実存を規定する条件として社会が、社会を規定する条件として地球史的状況が存在するからだ。逆にいえば、地球史的状況が変化すれば、実存的反出生主義や社会的反出生主義への応答も変化せざるを得ないのであり、そうした変化なしには、たとえ地球史的反出生主義への応答が可能になったとしても、他の二つの問題系への従来の応答との間に矛盾が生じるということが大いに考えられるということである。こうした点に鑑みれば、地球史的反出生主義が提起する問いは、教育学のまさに根幹に関わるものであり、きわめて重要な意味をもっているといえる。まずはその問いの「新しさ」を見きわめ、これまで自明とされてきた教育学の枠組みそのものを組み替えていく必要があるだろう。反出生主義的思想に対する応答の試みは、緒に就いたばかりである。

参考文献

Benatar, D. *Better Never Have to Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press, Oxford, 2006.〔小島和男・田村宜義訳『生まれてこないほうが良かった』すずさわ書店、2017年。〕

Boonin, D. “Better to Be”, *South African Journal of Philosophy*, Vol. 31, No. 1, 2012, pp.10-25.

Coates, K. *Anti-Natalism: rejectionist Philosophy from Buddhism to Benatar*, First Edition Design Publishing, 2014.

Jonas, H. *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische*

Zivilisation, Suhrkamp, 2003.〔加藤尚武監訳『責任という原理：科学技術文明のための倫理学の試み』、東信堂、2000年。〕
Weinberg, R. “Is Having Children Always Wrong?”, *South African Journal of Philosophy*, Vol. 31, No. 1, 2012, pp. 26-37.

猪狩彌助「2　輪廻と業」『岩波講座　東洋思想　第六巻　インド思想　2』長尾雅人・井筒俊彦・福永光司・上山春平・服部正明・梶山雄一・高崎直道編、岩波書店、1988年、297-328頁。
居永正宏「フェミニスト現象学における「産み」をめぐって：男性学的「産み」論の可能性」『女性学研究』第22号、2015年、99-126頁。
稲原美苗・川本唯史・中澤瞳・宮原優『フェミニスト現象学入門：経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版、2020年。
大谷崇『生まれてきたことが苦しいあなたに：最強のペシミスト・シオランの思想』星海社新書、2019年。
岡部美香・小野文生編『教育学のパトス論的転回』東京大学出版会、2021年。
加藤秀一「「生まれないほうが良かった」という思想をめぐって」『社会学評論』第55巻第3号、2004年、298-313頁。
加藤秀一『〈個〉からはじめる生命論』NHK出版、2007年。
加藤秀一「〈生む自由／生まれる自由〉のためのノート」加藤秀一編『生：生存・生き方・生命（自由への問い　8）』岩波書店、2010年、87-115頁。
川上未映子『夏物語』文藝春秋、2019年。
川上未映子・永井均「反出生主義は可能か：シオラン、ベネター、善百合子」『文藝別冊　川上未映子』河出書房新社、2019年、74-85頁。
小泉義之「天気の大人」『現代思想』第47巻第14号、青土社、2019年、20-26頁。
小島和男「反-出生奨励主義と生の価値への不可知論」『現代思想』第47巻14号、青土社2019年、84-93頁。
斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、2020年。
シオラン, エミール著、出口裕弘訳『生誕の災厄』紀伊國屋書店、1976年。
篠原雅武『人新世の哲学：思弁的実在論以後の「人間の条件」』人文書院、2018年。
志水宏吉編『「力のある学校」の探究』大阪大学出版会、2009年。
『聖書　新共同訳』日本聖書協会、1987年。
ソポクレス著、高津春繁訳『コロノスのオイディプス』岩波書店、1973年。
田中智輝・小島和男・福若眞人・樋口大夢・村松灯「出生の可能性と暴力性：

出生主義と反出生主義のあいだで」『教育哲学研究』第123号、2021年、94-100頁。
戸谷洋志「反出生主義」『現代思想』第47巻第6号、青土社、2019年、44-49頁。
戸谷洋志「ハンス・ヨナスと反出生主義」『現代思想』第47巻第14号、青土社、2019年、170-178頁。
戸谷洋志・石神真悠子・田中智輝・田中直美・村松灯「ヨナスとアレント：出生をめぐる思想と未来への責任」『近代教育フォーラム』第29巻、2020年、124-130頁。
西平直『誕生のインファンティア：生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』みすず書房、2015年。
納富信留「序章　世界哲学史に向けて」『世界哲学史1：古代Ⅰ　知恵から愛知へ』伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留編、筑摩書房、2020年、11-22頁。
橋本泰元・宮本久義・山下博司『ヒンドゥー教の辞典』廣済堂、2005年。
檜垣立哉『子供の哲学：産まれるものとして身体』講談社、2012年。
ベネター, デイヴィッド著、小島和男訳「考え得るすべての害悪：反出生主義への更なる擁護」『現代思想』第47巻14号、青土社、2019年、84-93頁。
松岡亮二『教育格差：階層・地域・学歴』ちくま新書、2019年。
森岡正博『生まれてこない方がよかったのか？：生命の哲学へ』筑摩書房、2020年。
森岡正博・戸谷洋志「討議　生きることの意味を問う哲学」『現代思想』第47巻14号、青土社、2019年、8-19頁。
吉沢文武「ベネターの反出生主義をどう受け止めるか」『現代思想』第47巻第12号、青土社、2019年、129-137頁。
吉永明弘「人新世下のウィルダネスと「都市の環境倫理」」『現代思想』第47巻第12号、青土社、2019年、22-28頁。
吉本陵「人類の絶滅は道徳に適うか？：デイヴィッド・ベネターの「誕生害悪論」とハンス･ヨーナスの倫理思想」『現代生命哲学研究』第3巻、2014年、50-68頁。

本研究の一部は公益財団法人上廣倫理財団の研究助成を受けたものです。